



Title	1962年度北海道大学合格者の出身高等学校に関する一考察
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	北海道大学大学文書館年報, 14, 114-139
Issue Date	2019-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73819
Type	bulletin (article)
File Information	ARHUA_14_6.pdf



[Instructions for use](#)

< 研究ノート >

1962年度北海道大学合格者の出身高等学校に関する一考察

逸見 勝亮

はじめに

小稿の目的は、北海道大学（以下で北大と略記する場合がある）の入学者は、いずれの高等学校（以下で高校と略記する場合がある）出身者なのかを、筆者が北大文類に入学した1962年度を事例として確かめることである。

1962年度北大合格者を、文類・理類・水産類・医学進学課程との募集単位毎に、北海道内と道外都府県とに分けて、合格者数と出身高校の整理を試みる。

1962年度入学者を対象に選んだのは、筆者が属した1962年度文類1年3組、サークル活動、学部移行後の学生・院生生活、卒業後の様々な場面で、何らかの交流があった同期生たちの出身高校を知る機会がなかったわけではないが、1962年度合格者の端的な属性である出身高校を知っておきたい、とのごく単純で主観的な動機である。

入学者はいずれの高等学校出身者なのかを調べようとして、入学者の出身高校を時系列で示す学内の資料に辿り着けなかったときに、自身の入学年度からは始めるしかなかった。折しも1962年は、北海道においても高校生急増対策として公立・私立高校の新設が進む最初期に位置する。幾分時期はずれるが、高校生急増対策は公立高校通学区域の拡大をともなって展開した。

他の年度と比較することにも意味はあろうかと選んだのは1978年度である。

北大は、翌1979年度の共通一次試験の導入を機に、学生編成・学生募集単位のうち文類・理類をそれぞれ文Ⅰ～文Ⅲと、理類を理Ⅰ～理Ⅲへと変更すると決定していたので、1978年度入学者は、学生編成・学生募集単位が文類・理類・水産類、医学進学課程、歯学進学課程であった最後の入学生であった。

なお、資料整理の都合上1978年度合格者については、文類の北海道内合格者の出身高校に限定した。

依拠する資料は、1962・1978年度ともに新聞記事である。

入学試験——政府・行政機関・財界の動勢、大学入学資格の法制度と運用、入学試験問題、共通試験、志願倍率、過年度卒業者〔所謂浪人〕と予備校、父母の経済的条件、奨学金制度など多様な課題が関連している——は、大学が高校生に相まみえるほぼ最初の場である。

多くの志願者を募ることは大学にとって常に喫緊の課題であるが、いずれの高等学校出

身者なのかという、志願者・入学者の属性は踏まえられていない。たとえば、試験場監督員（教員）にとって、重要なことは眼前の受験生の出身高校ではなく、机上に置いた受験票の番号と座席番号との異同である。

北大でも、オープンキャンパス、進学相談会、高校生の北大訪問受付など高校生を対象とした企画を実施している。2018年度の実施状況の概略は以下のようである。

《オープンキャンパス》

8月4～7日に開催し、高校生・保護者・市民19,600名が、実験・体験ゼミなどの高校生限定プログラムには1,514名が参加した¹⁾。

《進学相談会》

8月25日に東京で、10月7日に大阪で開催し、それぞれ1,110名、682名が参加した²⁾。

《北海道大学への訪問（高等学校向け）》

北大HPには、「受験の意識を高める」ために、修学旅行・総合学習などの一環として北大訪問希望に応じているが、訪問者数が急増しており、訪問希望に対応できないので、事前申請を条件に、構内自由散策、総合博物館・北大交流プラザ「エルムの森」の見学に限定して見学を受け入れるとある³⁾。

また、高等学校への「出前授業」に応じている理学部物理学科の事例も存在する⁴⁾。

いずれも入学志願者を募るための施策である。

法人化後の国立大学は、何事につけ目標・計画・自己評価を明示し、かつ評価を受けなければならず、北大も入学者選抜について謳っている。

北大の「第一期中期目標・中期計画」（2004～2009年）には、「学士課程においては、市民としての自覚を持って社会に参加すること、専門の基礎となる学問やコミュニケーションの方法を身に付けること、特定の専門分野を広い視野のもとに学ぶこと、を目指した教育を通じて、国際的に通用する高度な学問的素養を持ち、健全な市民としての確かな判断力とリーダーシップを発揮できる人材を育成するとともに、専門職業人として指導的立場に立ちうる人材の育成を目指す」とある。そのうえで、「学士課程教育を受けるにふさわしい学力を備えるとともに、向学心・創造力・倫理性に富み、論理的思考力とリーダーシップを持つ学生を受け入れることを目指し、諸種の資質と能力をはかる多様な選抜制度を通じて入学者を選抜する」と述べている。「向学心・創造力・倫理性に富み、論理的思考力とリーダーシップ」を掲げてはいるが、北大が入学試験において問うているのは「学士課程教育を受けるにふさわしい学力」である⁵⁾。

I 北海道大学入学者

北大は志願者・合格者・入学者についてどのように把握しているであろうか。2018年度の事例を掲げておく。

北大HP上の「平成30年度入学志願者数及び合格者数等（一般入試前期日程）」（30.4.1）、

「平成30年度入学志願者数及び合格者数等（一般入試後期日程）」(30.4.1)によって、募集単位毎の定員・志願者（全体・女子）・受験者（同）・当初合格者（同）・入学者（同）の人数を知ることができる⁶⁾。

また、広報誌『北大時報』上の「平成30年度入学者の道内・道外別及び卒業年度調べ」によって、入学者の道内・道外・2017年度卒業・過年度卒業の人数を、「平成30年度入学者の都道府県分布及び地域比率」によって、入学者の都道府県毎の人数を知ることができる⁷⁾。

1949～2001年度の募集単位毎の定員・志願者・受験者・合格者・入学者数は、『北大百二十五年史』論文・資料編に、以下のように載っている。

- ①「北海道大学学生定員・志願者・合格者・入学者数（1949～1976）」
- ②「北海道大学学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1977～1978）」
- ③「北海道大学学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1979～1994）」
- ④「北海道大学（文学部・教育学部・法学部・経済学部・理学部・医学部・歯学部・薬学部）学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1995～2001）」
- ⑤「北海道大学（工学部・農学部・獣医学部・水産学部・全学部合計）学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1995～2001）」
- ⑥「北海道大学（一般入試を除く）学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1995～2001）」⁸⁾

管見の限り、入学者・出身高等学校に関する北大の記録は、帝大簿書311「入学関係書類 自昭和二十六年十一月至全二十七年十二月 [庶務課]」（北海道大学大学文書館所蔵）中に、以下の2点が存するのみであった。

- ①「昭和二十七年度入学許可者名簿」（謄写印刷）

募集単位毎に、文類245名、理類743名、体育19名、音楽15名、遠洋漁業45名、漁業46名、合計1,113名の名簿である。受験番号・出身高校・氏名の順に、許可者（合格者）を配してある⁹⁾。

- ②「（昭和27年度入学）学生名簿 北海道大学一般教養部」（活版印刷、一枚物）

クラス（1～18組）毎の学生名簿（1,042名）である¹⁰⁾。

北大は、1996年度までは受験番号を付して合格者名を大学の掲示板に張り出し、前後して合格者宛に合格の旨と入学手続必要書類等を送付した。合格者の発表である。

ラジオ放送は、合格者名と出身高校を読み上げ、当日の夕刊は合格者（出身高校）を載せた。

一方、入学者名・本籍都道府県ならば、『北海道大学一覧』（1952年度版～1972年度版）中に、当該年度入学生として載ってはいる¹¹⁾。

このような統計や新聞各社へ提供した名簿などの基礎資料として、出身高校別あるいは本籍都道府県別入学者——入学者の出身高校所在地と本籍は必ずしも同一ではない——の資料を作成したことは確かだが、それらは見当たらない。

時期は下る。1993年3月20日付『北海道新聞』（朝刊）は、「氏名と出身高校名を載せた合格者名簿のほかに、北大や道教大などからは資料として出身高校別合格者数が提供されている」¹²⁾と報じており、北大合格者に関する新聞記事の取材源は、北大が作成して新聞社各社へ提供した合格者（出身高校）名簿である。

要するに、1949年度以降の入学者氏名と出身高校を示す資料は、「昭和二十七年入学許可者名簿」以外は見当たらず、新聞掲載の合格発表記事による他ないのである。

このような資料の状況を踏まえ、小稿では少なくとも合格者が入学を辞退することを前提としながら、以後合格者を入学者と見なして論を進める。

Ⅱ 1962年3月18日

1962年度北大教養部の学生編成・募集単位毎の定員・志願者数は、文類は270・2,337名、理類は893・3,808名、水産類は205・1,041名、医学進学課程は80・454名であった¹³⁾。競争率（志願者数／定員）はそれぞれ8.7倍、4.3倍、5.1倍、5.7倍であった。

筆者は、1962年3月2日に試験会場（現在は、情報基盤センターが建っている辺りにあった教養部の教室）を下見して、母親が手配した大叔父の遠縁が営む学生下宿（北26条西3丁目）に泊めてもらった。

北大は、3月3日に国語・社会科・理科を、4日には外国語・数学を課す入学試験を実施した。社会科は、社会・人文地理・日本史・世界史から2科目を、理科は化学・物理・生物・地学から2科目を、外国語は英語・独語・仏語から1科目を、出願時にあらかじめ選択しておかなければならなかった。数学は数学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲから文類は2科目を試験問題配布後に選択し、理類・水産類・医学進学課程には3科目全てを課した。

1962年3月4日付『北海道新聞』朝刊は、「試験科目は国語、社会、理科、数学、外国語の五科目で、配点は各科百二十点満点の六百点満点。例年最低合格圏が五〇―五五％、安全圏にもぐり込むにはまず六五％を確保しなければむり。国語、社会などの人文系は平均点は外国語、数学に比べてかなり高いので、ヤマは二日目の外国語と数学」と報じている¹⁴⁾。

3月18日午前9時10分から中央講堂（クラーク会館北側に位置していたが、1964年11月に取り壊された）の特設掲示板に、受験番号・合格者氏名を張り出した¹⁵⁾。NHK第一放送は9時15分に、HBCラジオは9時45分と午後2時に「北大入学試験合格者氏名発表」を組み、氏名・出身高校を報じた。HBCテレビは11時から「北大入試合格者発表＝北大構内」において特設掲示板に張り出した合格者氏名掲示を中継した¹⁶⁾。そして、各紙夕刊が募集単位毎の合格者名（出身高校）を載せた。

合格者は、文類320名、理類940名、水産類202名、医学進学課程86名、合計1,548名（特別入学生6名を含む）であった。特別入学生の内訳は、理類に沖縄出身者1名、外国人2名、水産類に外国人1名、医学進学課程に沖縄出身者1名、外国人1名であった¹⁷⁾。

新聞は、「現役、浪人が半々／北大、入試合格者を発表／ことしも女子が進出」と見出しを掲げて、以下のように報じた。

合格圏は六百点満点で三百三十点から三百六十点と例年並みだが、文類の成績向上が目立ったのがことしの大きな特徴。平均十五、六点のアップで例年理類より低かった合格最低点がことしは初めて理類を上回り、医学進学課程につぐ難関となった。教養部ではこれまでのように理数系が不得手だから文類を志願するというのはむしろかしくなるだろうといている。

半面、理類は工学部の第二機械工学科の増員などで定員が六十人もふえ、昨年よりわずかながら楽だった¹⁸⁾。

『北大時報』第96号 (1962年3月31日)「日誌」欄には、

三月 三日 北海道大学入学試験

四日 〃

(中略)

十七日 入学試験委員会

十八日 入学試験委員会、合格者発表

同じく「行事予定」欄には

四月 十日 入学宣誓式 (十時、十一時の二回)

(以下略)

とある¹⁹⁾。公式儀式名は、「入学式」ではなく「入学宣誓式」であった。

「入学宣誓式」はクラーク会館大講堂 (現在の座席数は510) で執り行われ、1962年4月10日付『北海道新聞』(夕刊)は、「北大の入学式が十日午前十時、十一時の二回にわけクラーク会館で行われた」と報じている。1回目は文類・水産類と医学進学課程の、2回目は理類の新入生が参列した。同紙掲載写真には、2階席を埋めた父母、1階席に起立して並ぶ新入生、オーケストラボックスに立つ指揮者、宣誓文を読み上げている新入生代表、杉野目晴貞学長が写っている²⁰⁾。

入学者は文類275名、理類880名、水産類186名、医学進学課程85名、合計1,426名であった²¹⁾。合格者は、文類320名、理類940名、水産類202名、医学進学課程86名であったことは先述した。合格者中文類では45名、理類では60名、水産類では16名、医学進学課程では1名、合計122名が入学手続きを行わなかったのである。

拙稿「僕の失敗」(『えるむ』第130号、北海道大学学生委員会、2009年2月、4～5頁)に、「最初に出会った北大の教員は阿部保 (1911～2007年)、僕も一員となった1962年文類1年3組の担任である。入学式後に教室に参集した僕らに「下駄を履いて来ないように」とだけ述べると退出した」と記してある。

筆者は10時開会の「入学宣誓式」に出席したが、1,426名全員が参加するには、2回に分けても入りきらない。2回実施したとの記憶は定かではないが、大講堂には立錐の余地はなかった。杉野目晴貞学長の式辞は記憶がないが、知り合っすぐの年嵩の級友が「ト

リカプト・アルカロイドの構造式を特定した人」と教えてくれた。

筆者の大学初日がいづであるかは定まらないが、「毎朝 HR に集い、出欠を確認する」ことはないと知り、トリカプト・アルカロイドで始まった。何の準備もないままにである。

Ⅲ 1962年度北海道大学合格者の出身高等学校

1962年度北海道大学合格者数と出身高等学校を、文類・理類・水産類・医学進学課程毎に、さらに道内・道外都府県毎に整理して以下に掲げる。出典はいずれも「北大入試合格者」（1962年3月18日付『北海道新聞』（夕刊））である。

1. 文類道内合格者数と出身高等学校

巻末の「付表1 1962年度文類道内合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

文類に北海道内から合格した274名は59高等学校の、1名は大学入学資格検定合格の出身者で、文類合格者320名の85.6%を占めた。

2. 文類道外都府県合格者数と出身高等学校

巻末の「付表2 1962年度文類道外合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

文類に北海道外都府県から合格した46名は、18都府県42高等学校の出身者で、文類合格者320名の14.4%であった。

それらを都府県・合格者数（出身高等学校数）として概括すれば、以下のようである。合格者1名の場合は学校数を省略する。

東京12（12）、大阪4（3）、茨城3（1）、静岡3（3）、愛知3（3）、香川3（3）、福岡3（3）、岩手2（1）、栃木2（2）、埼玉2（2）、長野2（2）、福島1、群馬1、神奈川1、京都1、兵庫1、岡山1、愛媛1

3. 理類道内合格者数と出身高等学校

巻末「付表3 1962年度理類道内合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

理類に北海道内から合格した536名は、79高等学校の出身者で、理類合格者940名の57%を占めた。

4. 理類道外都府県合格者数と出身高等学校

巻末「付表4 1962年度理類道外合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

理類に北海道外都府県から合格した404名は、44都府県235高等学校の出身者で、理類合格者940名の43%を占めた。

それらを都府県・合格者数（出身高等学校数）として概括すれば、以下のようである。合格者1名の場合は学校数を省略する。

東京85 (43)、愛知36 (16)、大阪25 (17)、神奈川25 (11)、静岡17 (11)、兵庫16 (11)、埼玉14 (5)、長野14 (7)、福岡13 (10)、青森12 (4)、広島12 (6)、茨城9 (2)、千葉9 (6)、栃木8 (6)、秋田7 (3)、岩手7 (4)、群馬7 (4)、富山7 (5)、福島6 (4)、山口6 (3)、山形5 (3)、福井5 (3)、高知5 (2)、新潟4 (4)、石川4 (3)、岐阜4 (2)、岡山4 (4)、島根4 (4)、香川4 (4)、宮崎4 (4)、愛媛3 (3)、山梨3 (3)、三重3 (2)、京都3 (3)、和歌山2 (2)、鳥取2 (2)、徳島2 (1)、佐賀2 (2)、宮城1、滋賀1、奈良1、大分1、熊本1、鹿児島1

5. 水産類道内合格者数と出身高等学校

巻末の「付表5 1962年度水産類道内合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

水産類に北海道内から合格した143名は、51高等学校の出身者で、水産類合格者202名の70.8%を占めた。

6. 水産類道外都府県合格者数と出身高等学校

巻末の「付表6 1962年度水産類道外合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

水産類に北海道外都府県から合格した59名は、26都府県57高等学校の出身者で、水産類合格者202名の29.2%を占めた。

それらを都府県・合格者数(出身高等学校数)として概括すれば、以下のようである。合格者1名の場合は学校数を省略する。

東京11 (11)、愛知7 (7)、大阪6 (5)、静岡4 (4)、福島3 (2)、福岡3 (3)、栃木2 (2)、埼玉2 (2)、長野2 (2)、兵庫2 (2)、岡山2 (2)、秋田1、山形1、茨城1、群馬1、新潟1、神奈川1、富山1、福井1、岐阜1、島根1、香川1、愛媛1、高知1、大分1、鹿児島1

7. 医学進学課程道内合格者数と出身高等学校

巻末の「付表7 1962年度医学進学課程道内合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

医学進学課程に北海道内から合格した51名は、29高等学校の出身者で、医学進学課程合格者86名の59.3%を占めた。

8. 医学進学課程道外都府県合格者数と出身高等学校

巻末の「付表8 1962年度医学進学課程道外合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

医学進学課程に北海道外都府県から合格した35名は、19都府県29高等学校の出身者で、医学進学課程合格者86名の40.7%を占めた。

それらを都府県・合格者数(出身高等学校数)として概括すれば、以下のようである。合格者1名の場合は学校数を省略する。

東京9（8）、兵庫3（2）、青森2（2）、山形2（1）、栃木2（2）、山梨2（1）、長野2（1）、山口2（1）、秋田1、福島1、埼玉1、千葉1、神奈川1、静岡1、愛知1、石川1、福井1、京都1、鹿児島1

合格者氏名（出身高校）は新聞記事に依拠したが、「関東学院六浦」「吉田島農林」「城南」などと府県名を略した例も散見された。「六浦」「吉田島」は地名と考えて、何れも神奈川県所在校とたどり着けたものの、「城南」と「徳島城南」との異同は俄には判断がつかなかった。

巻末の「付表4 1962年度理類道外合格者数・出身高等学校」中に、1名が京都府立城南高校から合格したと記すことがなかった事情は、敢えて記せば以下のものである。すなわち、『北海道大学一覧 昭和三十七年』には、「城南」高校出身者の氏名が載っていること、『北海道大学一覧 昭和四十一年』の卒業生名簿で、「城南」高校出身者の氏名と卒業した学部学科を確認し、さらに同じ学科卒業の知友に出身学校の問い合わせを依頼して、京都府立城南高校と確定した。

ちなみに、京都府立城南高校は、2009年4月に京都府立西宇治高校と統合して、京都府立城南菱創高校となり現在にいたっている²²⁾。

Ⅳ 1959～1961年・高校生急増対策と通学区域の拡大

1962年度北大合格者は、1961年度高校卒業者と過年度卒業者との比率は「ほぼ半々で浪人はほとんどが二年浪人まで」²³⁾だったとすれば、1962年度合格者の大部分が高校に入学したのは1958ないし1959年度である。では、筆者が入学した1959年の高校は、果たしていかなる時代的特徴を帯びていたのだろうか、北海道における高校生急増対策と通学区域の拡大とに限定して考察を試みる。

その前に通学区域の拡大と高校生急増対策とに関する文部省の動勢をごく概略的に記しておく。

《高校生急増対策》

『時事通信内外教育版』（1960年7月12日）は、文部省が1963年度から予想される高校生の急増に対処するための基本的方針案を「まとめたもようである」と報じた。同記事によれば、その概要は以下のようである。

- ①今後3年間に予想される100万名の生徒増のうち、約65万名を公立学校で収容し、35万名を私立にまかせる。
- ②全日制高校を150～200校程度増設して15万名程度を収容する。社会的要請を考慮して6割を工業を中心とした職業課程、4割を普通課程とする。
- ③約25万名を学級定員増によって収容する。1学級当たりの定員は1割増となる。
- ④約25万名を全日制の学級増によって収容するが、学校新設と同様に職業課程増設を重

点とする²⁴⁾。

文部省の動向に呼応するように、1960年8月19日、都道府県教育委員会委員長・教育長協議会は、1963年度からの急増見込みなので、1961年度から公立学校新設・学級増・用地・施設・設備への国庫補助と高等学校学級編成・教職員定数基準の法制化を要請した²⁵⁾。

《公立高等学校通学区域》

敗戦後の新制高等学校発足に際しては、進学可能な公立高等学校は、都道府県教育委員会が定めた通学区域にしたがうこととなっていた。

すなわち、「都道府県教育委員会法」(1948年7月15日制定・公布)第54条は、「通学区域」設定について以下のように定めた。

第五十四条 都道府県委員会は、高等学校の教育の普及及びその機会均等を図るため、その所轄の地域を数箇の通学区域に分ける。但し、必要がある場合には、生徒の就学につきこれを調整することができる。

「都道府県教育委員会法」に取って代わった「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」(1956年6月2日制定、6月30日公布)第50条は、「通学区域の指定」について以下のように定めた。

第五十条 都道府県委員会は、高等学校の教育の普及及びその機会均等を図るため、教育委員会規則で、当該都道府県内の区域に応じて就学希望者が就学すべき都道府県委員会又は市町村委員会の所管に属する高等学校を指定した通学区域を定める。ただし、一の通学区域内にある都道府県委員会又は市町村委員会の所管に属する高等学校に就学希望者が集中する等特別の事情がある場合においては、通学区域について必要な調整を行うことができる。

2 前項の場合において、市町村委員会の所管に属する高等学校に係る部分については、都道府県委員会は、あらかじめ当該市町村委員会の意見をきかなければならない。

三上和夫・野崎洋司は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第50条は、通学区の広域化と、1通学区に複数の同一課程同一学科の高校の併存を認め、入学希望者の特定校集中が過度に起きた場合にのみ都道府県教育委員会が調整すると規定したと述べている。「都道府県教育委員会法」第54条が謳った「所轄の地域を数箇の通学区域に分ける」との規定を欠落し、学区を分割・縮小するという行政目標が希薄化し、統合を進める根拠となったとの主張である²⁶⁾。

北海道においても、高校生急増対策就中高等学校新設と通学区域拡大とは、時間のずれを含みつつも密接にかかわって展開した。

室蘭市・幌別町にも、高校生急増対策は静かに立ち現れた。普通科高校の学級増と工業高校の学科増、私立高校の新設である。

室蘭清水丘高校 1959年普通科1学級増、定時制普通科1学級増／1963年普通科2学級増

室蘭栄高校	1958年家政科1学級新設／1959年普通科1学級増／1960年普通科1学級増
室蘭工業高校	1957年電気科1学級新設／1958年工業化学科1学級新設、電気科1学級増
室蘭大谷高校	1958年普通科発足 ²⁷⁾

1958～1978年——1979年1月の共通一次試験実施を機に、北大は1979年度入学試験から学生募集単位を、従来の文類・理類・水産類・医学進学課程・歯学進学課程のうち、文類・理類の区分を文Ⅰ～文Ⅲ、理Ⅰ～理Ⅲへと変更した。1979年度合格者の出身高校を検討するのなら、1978年度の高等学校の状況を把握しておく必要がある——の北海道における高校増設を踏まえるなら、1959年は高校生急増対策が展開する初期との位置づけは鮮明となるはずである。

以下に1958～1978年までの間に設置をみた高等学校名を掲げる。

1958年	道立（長沼、南幌）、市立（札幌旭丘）、私立（室蘭大谷、旭川、酪農学園女子、札幌慈恵、帯広商業、札幌第一、三笠大谷、函館女子商業）（道立2、市立1、私立8）
1959年	道立（秩父別農業、士別商業）、市立（帯広南商業）、私立（函館ラ・サール、滝川商業、岩見沢女子、藤の沢女子、網走女子）（道立2、市立1、私立5）
1960年	私立（旭川実業、釧路第一、岩見沢商業）（私立3）
1961年	道立（紋別南）、町立（恵庭南）、私立（室蘭カトリック女子、苫小牧女子、北星学園男子）（道立1、町立1、私立3）
1962年	市立（札幌開成）、私立（札幌女子、室蘭第二大谷）（市立1、私立2）
1963年	道立（札幌琴似工業、富良野工業、室蘭東）、市立（函館北）、私立（札幌創成、岩見沢南、稚内大谷）（道立3、市立1、私立3）
1964年	道立（札幌東商業、北見工業、帯広工業）、市立（旭川北都商業）、私立（駒沢大学附属岩見沢、駒沢大学附属苫小牧、東海第四、北海道日本大学）（道立3、市立1、私立4）
1965年	私立（北星学園余市）（私立1）
1966年	道立（札幌啓成、留萌工業）、私立（聖心女子学院）（道立2、私立1）
1967年	道立（有朋）、市立（富良野農業）（道立1、市立1）
1969年	道立（美唄聖華）（道立1）
1970年	道立（根室西）、町立（恵山）（道立1、町立1）
1972年	道立（札幌北陵、桧山北）（道立2）
1973年	道立（千歳北陽、札幌星園定時制）、市立（札幌藻岩、滝川西）（道立2、市立2）
1974年	道立（札幌手稲）、市立（岩見沢緑陵）（道立1、市立1）

- 1975年 道立(札幌丘珠、奥尻、名寄工業、羅臼)、市立(札幌清田)(道立4、市立1)
- 1976年 道立(苫小牧南)(道立1)
- 1977年 道立(札幌西陵、札幌白石)(道立2)
- 1978年 道立(北広島、石狩、美幌農業、釧路東、静内農業、有朋定時制)(道立6)²⁸⁾

道立高校が34校、市町立高校が12校、私立高校が30校、合計で76校の増設を見たのである。

筆者が北大に入学した1962年は、高校に入学した1959年までを視野に含めれば、高校生急増対策が展開した最初期に位置していた。

高校の学科・学級増設は中学生の筆者には見えなかった。しかし、1958年に新設成った室蘭大谷高校は室蘭栄高校への自転車通学路にあり、1961年に室蘭カトリック女子高校(室蘭市)、1962年に室蘭第二大谷高校(幌別町)の新設をみたときには、高校生急増の趨勢を体感するには充分であった。

では、高等学校通学区域の拡大についてはどうか。

「公立高等学校通学区域規則」(北海道教育委員会規則第九号、1951年5月15日)第1条は、上述の「都道府県教育委員会法」第54条にもとづき、北海道における公立高等学校の「通学区域制度を確立し、もつて、高等学校の教育の普及及びその機会均等を図ることを目的とする」と謳い、第3条に以下のように「通学区域設定の方針」を掲げた。

第三条 通学区域は、地勢、交通状況、行政区画、学校の分布及び通学状況等を考慮して定めるものとする。

- 2 通学区域は、一つの高等学校ごとに定める。
- 3 一つの高等学校の通学区域は、同種の他の高等学校の通学区域としない。
- 4 一つ又は数個の通学区域を包括して学区を置く。
- 5 前三項の規定は、水産、工業及び商業課程について、及び前項の規定は農業課程について、それぞれ、なお当分の間適用しないものとする²⁹⁾。

同規則「別表」は、全日制普通科を設置している全ての高校毎に通学区域を、農業課程を併置している12校と農業高等学校7校は、全道を区分した学校毎の通学区域を設定した。「水産課程」「工業課程」「商業課程」は「全道一通学区域」とした³⁰⁾。どの公立全日制普通科高校へ進学するのかは、居所によって決まっていたのである。

北海道教育委員会は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」施行後も、公立高等学校普通科を増設する度に通学区域を設定し、上述した「公立高等学校通学区域規則」(北海道教育委員会規則第九号、1951年5月15日)第3条に定めた「通学区域は、一つの高等学校」とする通学区域の設定を1965年度までは維持した。

したがって、筆者が中学校3年生であった1958年には、全日制普通科高等学校毎に1通学区域を設定しており、室蘭清水丘高校は室蘭市の西部を、室蘭栄高校は室蘭市の東部と

幌別町をそれぞれの通学区としていた。筆者の父母の居所が幌別町にあるからには、室蘭清水丘高校を選択する余地はなかった。

『北海道学校一覧 昭和三十三年度』によれば、1958年度の室蘭市（入学高等学校所在地）と幌別町にあった高等学校は、123頁の記述と重なるが、以下のものであった。

- | | |
|--------------|---|
| ①幌別町立幌別高等学校 | 定時制・普通科 |
| ②室蘭市立鶴ヶ崎高等学校 | 定時制・普通科 |
| ③室蘭栄高等学校 | 全日制・普通科・家政科／定時制・普通科 |
| ④室蘭清水丘高等学校 | 全日制・普通科・家政科／定時制・普通科 |
| ⑤室蘭商業高等学校 | 全日制・商業科 |
| ⑥室蘭工業高校 | 全日制・工業科（機械・金属工業・土木・電気・工業化学）／定時制・工業科（機械） |
| ⑦室蘭大谷高校 | 全日制・普通科 |

上記高等学校の他に、中学校卒業者を採用する日本製鋼所室蘭製作所技能者養成所・富士製鉄輪西工業学校があった³¹⁾。

室蘭商業高校は戦死した叔父が卒業した学校で多少の親近感はあり、家業の小間物屋を嗣ぐためにはとの想念はあった。祖父は日本製鋼所室蘭製作所鋳物工場の木型工であり、同製作所で働いている親類は多く、1954年11月に転居するまでは、工場群を眺めながら過ごしていたのだから、日本製鋼所室蘭製作所技能者養成所は羨望的であった。手先は不器用で運動能力に欠けていると自認していた身に、男子生徒間では瞬間的な身体能力の試験もある難関と噂があった同技能者養成所・富士製鉄輪西工業学校は遠かった。

他方で、僻地教育を特集した新聞記事と担任教師に惹かれ、隣家の青年が入所して小学校教員に就いたという道立教員養成所へ進みたいとの希望を懐いていたが、室蘭にもあった同養成所は1958年に廃止となった。

相談した中学校の英語の教師は、「子が幸せなら、親は幸せだ」と言った。その言葉に押されながらも、ほぼ全てを先送りして筆者の進学先高校は決まった。

中学校同期生のうち室蘭工業高校へ進んだ6人は、他の高校へ進んだ級友たちと学力上の遜色はなかった。「手に職を」という強烈な意識と家族思いからの選択であった。3年後の自立を見据えた選択である。

小学校1～4年生まで同級で、住む家もごく至近であったAは、日本製鋼所室蘭製作所技能者養成所に合格し、室蘭栄高校定時制にも通っていたので、時に行き交うこともあった。筆者の転校後数年間の無音は、打ち解けた会話を邪魔して気恥ずかしく、会釈以上の交流は生まれなかった。やはり同じ小学校で1～5年生まで同級であった友人と、Aの職場を訪ねたのは50歳を過ぎてからである。電気炉・1万トンプレス・大型自動旋盤等の説明を頼もしく聴き、合間に双方の近親者の消息をようやく確かめもしたのであった。

北海道教育委員会は普通科高校増設の都度、新たな通学区域を設置した。例えば、札幌

旭丘高校新設(1958年4月1日)に際して、従前の4通学区域のうち札幌西・南・北高校の通学区域から相応の地域を割いて、旭丘高校通学区域を設置した³²⁾。

その後の通学区域の改編はさまざまじい。

1965年6月28日、北海道教育委員会は「公立高等学校の通学区域に関する規則」を定め、従前の134通学区域を、1966年4月以降は以下の8通学区域とする(第2条第1項)と決定した。

石狩・後志学区	札幌・小樽・江別・千歳市、石狩・後志支庁所管区域
渡島・松山学区	函館市、渡島・松山支庁所管区域
胆振・日高学区	室蘭・苫小牧市、胆振・日高支庁所管区域
空知・留萌学区	夕張・岩見沢・留萌・美唄・芦別・赤平・三笠・滝川・砂川・歌志内・深川市、空知・留萌支庁所管区域
上川・宗谷学区	旭川・稚内・士別・名寄市、上川・宗谷支庁所管区域
網走学区	北見・網走・紋別市・網走支庁所管区域
十勝学区	帯広市、十勝支庁所管区域
釧路・根室学区	釧路・根室市、釧路・根室支庁所管区域 ³³⁾

1972年11月16日、北海道教育委員会は「公立高等学校の通学区域に関する規則」を全面改正して、1973年4月以降の通学区域を21通学区域に変更した。

21通学区域と区域内居住者が通学すべき高等学校(全日制、普通科)は以下のようであった。

石狩南学区	札幌東、札幌南、札幌月寒、札幌旭丘、千歳、恵庭南、恵庭北(7校)
石狩北学区	札幌西、札幌北、札幌啓成、札幌北陵、札幌開成、江別、野幌、当別(8校)
渡島学区	函館中部、函館西、函館東、函館北、松前、上磯、木古内、南茅部、森、八雲、長万部(11校)
松山学区	江差、松山北(2校)
後志南学区	寿都、蘭越、喜茂別、倶知安(4校)
後志北学区	小樽潮陵、小樽桜陽、岩内、余市(4校)
空知南学区	夕張東、夕張南、夕張北、岩見沢東、岩見沢西、美唄東、三笠、三笠高美、長沼、栗山、月形(11校)
空知北学区	芦別、赤平東、赤平西、滝川、砂川南、砂川北、歌志内、深川西、沼田(9校)
上川南学区	旭川東、旭川西、旭川北、富良野、上川、美瑛(6校)
上川北学区	士別、名寄、和寒、風連、下川、美深(6校)
留萌学区	留萌、増毛、羽幌、天塩(4校)
宗谷学区	稚内、浜頓別、枝幸、豊富、利尻(5校)

網走南学区	網走南ヶ丘、網走向陽、斜里、小清水、常呂（5校）
網走中学区	北見北斗、北見柏陽、美幌、津別、置戸、留辺蘂、佐呂間（7校）
網走北学区	紋別北、遠軽、湧別、滝上、興部、雄武（6校）
胆振東学区	苫小牧東、苫小牧西、追分、鶴川、穂別（5校）
胆振西学区	室蘭栄、室蘭清水丘、室蘭東、伊達、登別（5校）
日高学区	富川、静内、浦河（3校）
十勝学区	帯広柏葉、帯広三条、音更、上士幌、新得、清水、芽室、大樹、広尾、池田、本別、足寄、浦幌（13校）
釧路学区	釧路湖陵、釧路江南、釧路北陽、厚岸潮見、弟子屈、阿寒、白糠（7校）
根室学区	根室、根室西、中標津、標津（4校） ³⁴⁾

1953年に幌別町（登別市）に在住していた筆者は、公立全日制普通科を望むなら室蘭栄高校以外の選択の余地はなかったとは先述した。1973年の中学校3年生は、室蘭栄・室蘭清水丘・室蘭東・伊達・登別高校のいずれかを選択しなければならない。

結び

北海道大学の入学者は、いずれの高等学校出身者なのかを、筆者が入学した1962年度を事例として確かめた。

1962・1978両年度北大合格者のうち文類合格者の出身高校について、どのように変化したのか、あるいはしていないのか、気付いたことを記して結びに代える。

1962年度文類・理類・水産類・医学進学課程の定員はそれぞれ270・893・205・80名であったが、1978年度の文類・理類・水産類・医学進学課程・歯学進学課程の定員はそれぞれ565・1,215・215・120・80名であった。

この間に、文類の定員は2.09倍に、理類のそれは1.36倍に増えたのである。1978年度の志願者は文類が4,667名、理類は6,558名に達した。志願倍率は、理類が5.4倍、文類が8.26倍であった。

国立大学では、学生定員の増加は教育研究組織の拡大に随伴する。このことは、合格者の出身高校とは直接的関連はないし、立ち入って論ずるに資料も持ち合わせてはいないのだが、筆者は文類の定員倍増に興味があるという理由もある。

北海道内合格者の出身高校に限定するのは、顕著に変化を認められる北海道における公立高等学校通学区域の設定との関連への関心によっている。むろん、北海道外都府県合格者の出身高校を対象とするのは、手に余るとの切実な事情はある。

なお、仮説的に指摘するにとどめざるを得ないが、北海道内合格者のほとんどは公立高校出身者であることも、両年度の比較には好都合である。

1962・1978年度の文類北海道内合格者（出身高校）は、それぞれ274名（59校、検定1名）・345名（54校）であった。1978年度の文類北海道内合格者（出身高校）については、

巻末「付表9 1978年度文類道内合格者数・出身高等学校」を参照されたい。

巻末「付表1」「付表9」から、それぞれ合格者が多い順に高等学校10番（10番が複数ならそれらを含めたので、1962年度は12校、1978年度は11校）までを摘記して下記の表1、表2に掲げる。1962・1978年度の合格者数・学校名の順序で並べてある。

1962年度には、文類道内合格者274名中170名（62.04%）を上位12校が占めた。

1978年度には、文類道内合格者345名中244名（70.72%）を上位11校が占めた。

これらを踏まえた上で、表1と表2とを比較しよう。

表1によれば、1962年度の上位12校中で、札幌の4公立高校出身者が94名（55.29%）を、表2によれば、1978年度の上位11校中で、札幌の6公立高校出身者が164名（67.21%）を占めた。

「付表1 1962年度文類道内合格者数・出身高等学校」から、上記以外の札幌の高校出身者を摘記すれば、札幌藤女子4、札幌第一1、北海1（合計6名・3校）となる。いずれも私立高校である。

表1 1962年度合格者上位10番までの合格者数と出身高等学校

合格者数	高等学校名
28	札幌西
28	札幌南
24	札幌北
22	小樽潮陵
17	旭川東
14	札幌東
7	小樽緑陵
6	旭川北
6	小樽桜陽
6	帯広柏葉
6	帯広三条
6	滝川
計 170名	12校

表2 1978年度合格者上位10番までの合格者数と出身高等学校

合格者数	高等学校名
54	札幌北
43	札幌南
29	旭川東
28	札幌西
21	札幌旭丘
19	岩見沢東
15	小樽潮陵
10	札幌東
9	室蘭栄
8	函館中部
8	札幌開成
計 244名	11校

「付表9 1978年度文類道内合格者数・出身高等学校」から、同様に摘記すれば、公立高校は札幌啓成6、札幌月寒4、札幌藻岩3、札幌清田2、札幌北陵1、札幌手稲1（合計17名・6校）、私立高校は札幌光星3、札幌藤女子2（合計5名・2校）である。

これらを勘案すれば、1962年度文類道内出身者274名中の、札幌の高校出身者は100名（36%）を占め、1978年度文類道内出身者345名中の、札幌の高校出身者は186名（53.91%）に達する。

続いて、巻末の「付表1 1962年度文類道内合格者数・出身高等学校」に載っているが、「付表9 1978年度文類道内合格者数・出身高等学校」には載っていない29校を以下に列

挙する。

小樽緑陵、帯広三条、函館西、栗山、砂川南、室蘭清水丘、赤平、八雲、夕張南、稚内、歌志内、遠軽、三笠、阿寒、池田、浦河、興部、小樽千秋、北見柏陽、札幌第一、標茶、清水、斜里、寿都、千歳、奈井江、長沼、北海、余市

逆に「付表1 1962年度文類道内合格者数・出身高等学校」には載っていないが、「付表9 1978年度文類道内合格者数・出身高等学校」に載っている24校を以下に列挙する。

札幌旭丘、札幌開成、函館ラ・サール、札幌啓成、札幌月寒、札幌光星、札幌藻岩、北見北斗、夕張北、札幌清田、伊達、静内、士別、枝幸、根室、岩見沢西、滝上、美深、足寄、桧山北、函館高専、札幌北陵、札幌手稲、風連

北大入学者はいずれの高等学校の出身者か、手探りでここまでたどりついて、なお手探り状態にある。そうであるにしても、またあくまでも道内文類合格者に限定した仮説的な指摘だが、北大入学者は1962年度においても、既に札幌の高校出身者が多くを占めており、通学区域の拡大は一層札幌出身者の比率を高めた。

北大文類最後の道内合格者の53%は札幌に所在する高校出身者であり、道内合格者の30%は、札幌に所在する公立高等学校4校の出身者であるとの事実と、入学後の教育の課題とを結びつけて考察する方途を見出したいと願わぬではないが、このままではこれ以上踏み込んだ論議は叶いそうにはない。

拙稿「1962年3月18日」（『北海道大学150年史編集ニュース』第2号、2019年1月31日、2～3頁）では、出身高等学校数だけを掲げたのだったが、小稿では出身校の高等学校名を載せたという小さな試みは、なお試みの途上にある。

新聞記事で合格者の名前と出身高校を追いながら、入学試験で問うた「学士課程教育を受けるにふさわしい学力」を、学士課程教育の過程において鍛えあげるの、受け入れた側の課題だと呟いていたとは記しておく。

[注]

1) 「平成30年度オープンキャンパスを開催」『北大時報』第774号、2018年9月、9頁。

管見の限り、北大における高校生体験入学の嚆矢は、工学部が1994年8月8日に実施した1日体験入学である。札幌東・西・南・北・手稲、札幌市旭丘・開成、光星、旭川東、苫小牧東、留萌、茨城県土浦第一各高校から、36人が参加した（『北大時報』第485号、1994年8月、3頁）。

翌8月9日には、理学部が1日体験入学を実施し、札幌北・西高校、札幌市開成高校から44人が参加した（同上）。

11月12日には、教育学部が1日体験入学を実施し、道央圏13高から61人が参加した（『北大時報』第489号、1994年12月、11頁）。

学部単位の体験入学実施は、北大の学生編成・募集単位の変遷は別稿を期すほかないが、1995年度から「学部一貫教育」を標榜して、文・教・法・経・理・工・農・薬・獣医学部進学者の募集単位を文類・理類から学部へと変更したことへの対応である。

2) 「北海道大学進学相談会」を東京で開催」『北大時報』第774号、2018年9月、10頁。「北海道大学

進学相談会」を大阪で開催』『北大時報』第776号、2018年11月、10頁。

- 3) 「北海道大学への訪問 (高等学校向け) について」(北海道大学アドミッションセンター)。同記事掲載の Web ページの URL は下記のとおり (閲覧日は2019年2月13日)。

<https://www.hokudai.ac.jp/admission/about/visit.html>

- 4) 北大理学部物理学科は、HP に11テーマを掲げて「知的好奇心を刺激する授業で生徒の学力向上を願う高校教師」「そんな授業を受けてみたい」という高校生へ「出前授業」に応ずると呼びかけている。

2016年度には、立命館慶祥高校(「姿を変える不思議なニュートリノ」「すごいぞ、超伝導! ~超伝導と先端科学技術~)、旭川東高校(「熱って何?」)、小樽潮陵高校(「絶対零度の世界」)、札幌東高校(「絶対零度の世界」)において実施した。同記事掲載の Web ページの URL は下記のとおり (閲覧日は2019年2月14日)。

<http://phys.sci.hokudai.ac.jp/jp/physics/demae.html>

各学部 HP には、社会貢献の一環として「出前授業」、高校生対象の「模擬授業」などの記録が散見される。

- 5) 北海道大学「第一期中期目標・中期計画一覧表」(2004~2009年度)2~4頁。同一一覧表掲載の Web ページの URL は下記のとおり (閲覧日は2019年2月15日)。

https://www.hokudai.ac.jp/introduction/chuki_final.pdf

北海道大学「第二期中期目標・中期計画一覧表」(2009~2015年度)には、「入学者選抜に関する」項目はない。

北海道大学「第三期中期目標・中期計画一覧表」(2016~2021年度)には、「入学者選抜に関する目標」として、「広く世界に優秀な人材を求め、本学の教育を受けるにふさわしい学力・能力を備えた人材を多様な選抜制度により受け入れる」(3頁)とある。同一一覧表掲載の Web ページの URL は下記のとおり (閲覧日は2019年2月15日)。

<https://www.hokudai.ac.jp/introduction/180330chukiichiran.pdf>

「学士課程教育を受けるにふさわしい学力」について、当該「中期目標・計画」にはいかなる説明もない。

大学が示した「学士課程教育を受けるにふさわしい学力」の唯一の目安は、合格者の最低点である。

北大 HP の「平成30年度一般入試 合格者の平均点等一覧」は、配点合計・総合点最高点・総合点最低点・平均点(総合点・センター素点)を載せている。同一一覧掲載の Web ページの URL は下記のとおり (閲覧日は2019年2月15日)。

https://www.hokudai.ac.jp/admission/h30point_average.pdf

河合塾は、「過去の北海道大学入試問題の出題傾向・設問形式、難易度などの詳細な分析データ」をもとに、「来年度〔2019年度〕入試予想問題」を出題し、合格ラインを明示する「北大入試オープン(記述・論述型)」を実施した。「出題科目や出題形式、時間・配点については、すべて北海道大学の二次試験(前期日程)に準じます」ともある。同記事掲載の Web ページの URL は下記のとおり (閲覧日は2019年2月18日)。

<https://www.kawai-juku.ac.jp/trial-exam/zento/lineup/gd3/hokudai01>

多くの高校生は、全国的規模あるいは自校で実施する模擬試験結果、進路指導教員の示唆、過去問題の検討等を参考にして、入学試験に備える。高校生が目指すのは「合格ライン」である。

入学試験は「学士課程教育を受けるにふさわしい学力」を問うているのだが、成績順に募集定員までを合格者と判定する以上、「ふさわしい学力」と合格とは必ずしも同義ではない。入学後の教育が重要課題となる所以である。

- 6) 「平成30年度入学志願者数及び合格者数等(一般入試前期日程)」(30.4.1)、「平成30年度入学志願

者数及び合格者数等（一般入試後期日程）」(30.4.1)。同記事掲載の Web ページの URL は下記のとおり（閲覧日は2019年2月15日）。

https://www.hokudai.ac.jp/admission/h30shigansha_goukakusha.pdf

京都大学は、「平成30年度京都大学一般入試諸統計」（6頁）に、「志願者・入学者 出身高校等所在都道府県別調」を掲げている。同記事掲載の Web ページの URL は下記のとおり（閲覧日は2019年2月15日）。

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/admissions/undergrad/documents/h30shotoukei_1.pdf

北大の都道府県別志願者に関する統計は見当たらない。

- 7) 「平成30年度入学者の道内・道外別及び卒業年度調べ」「平成30年度入学者の都道府県分布及び地域比率」は、それぞれ『北大時報』第769号、2018年4月、105・106頁。
- 8) ①「北海道大学学生定員・志願者・合格者・入学者数（1949～1976）」、②「北海道大学学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1977～1978）」、③「北海道大学学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1979～1994）」、④「北海道大学（文学部・教育学部・法学部・経済学部・理学部・医学部・歯学部・薬学部）学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1995～2001）」、⑤「北海道大学（工学部・農学部・獣医学部・水産学部・全学部合計）学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1995～2001）」、⑥「北海道大学（一般入試を除く）学生定員・志願者・受験者・合格者・入学者数（1995～2001）」は、それぞれ『北大百二十五年史』論文・資料編（北海道大学百二十五年史編集室編・北海道大学発行、2003年）887～883・871～870・869～860・859～854・853～848・847～846頁。
- 9) 「昭和二十七年度入学許可者名簿」、帝大簿書311「入学関係書類 自昭和二十六年十一月至全二十七年十二月 [庶務課]」（北海道大学大学文書館所蔵）。
「北海道大学学生定員・志願者・合格者・入学者数（1949～1976）」の1952年度合格者数欄には、文類279名、理類743名、水産類91名（『北大百二十五年史』論文・資料編887頁）とある。その理由は、体育専攻19名・音楽教育専攻15名を文類に、遠洋漁業学科45名・漁業学科46名を水産類と一括して表記したことによる（『北大百二十五年史』論文・資料編883頁を参照した）。
- 10) 「（昭和27年度入学）学生名簿 北海道大学一般教養部」（前掲帝大簿書311に所収）。この名簿は毎年度作成し、新入生に配布されたであろう。筆者には同様の名簿の記憶がある。なお、留年者30名の記述もある。
- 11) 1962年度入学生の名簿は、「学生 教養部」の項に「昭和三十七年入学」（『北海道大学一覽 昭和三十七年』734～749頁）として載っている。クラスを表記していないが、募集単位毎に五十音順の配列を繰り返しており、クラス毎に区分した名簿である。ただし、理類最初の五十音順の配列（737頁）は、文類5組の名簿である。
- 12) 1993年3月20日付『北海道新聞』（朝刊）。
引例記事の見出しには「出身高別の合格者ランク表一競争あおる廃止を」とある。
1996年7月17日付『北海道新聞』（朝刊）は、「北大など国立三大学と、道東海大など私立三大学は十六日までに、来春の入試から合格者の氏名公表を取りやめることを決めた。……合格発表では各大学とも受験番号のみ学内に掲示するが、北大は合格者番号をインターネットで流すことも検討している」と報じた。
- 13) 「北海道大学学生定員・志願者・合格者・入学者数（1949～1976）」『北大百二十五年史』論文・資料編、886頁。
- 14) 1962年3月4日付『北海道新聞』（朝刊）。同記事は、社会・日本史・世界史は「一夜づけ組には難い」、人文地理は「比較的平易」、物理・化学の「難易度はほとんど変わらない」、生物・地学は「総じて出題傾向は例年と変わらず、受験生を極端にまどわすものは見られなかった」とも述べている。

筆者は、社会は日本史・人文地理を、理科は物理・生物を、外国語は英語を、数学は数Ⅰ・Ⅲを選択した。国語の5問中1題は古文・漢文の選択で、筆者は漢文(蘇軾の作品)を選んだ。社会・理科は高等学校2・3年で履修していた科目を選び、外国語は英語しか学んでいなかったこと、数学は数Ⅱの対数問題に躓いたからである。

未到達の募集要項・入試問題を見出せるなら、正確を期すことができるだろう。

- 15) 1962年3月18日付『北海道新聞』(夕刊)。

「一瞬息を殺して発表をみまもる受験生たち—北大中央講堂前の特設掲示板で」とキャプションを付し、事務官が掲示を貼りだしているところを見上げる受験生たちの写真を載せてもいる。

- 16) 「放送番組欄」、1962年3月18日付『北海道新聞』(朝刊)。

- 17) 「北海道大学学生定員・志願者・合格者・入学者数(1949~1976)」。「沖縄学生2名、特別入学外国人学生4名」は、1962年4月10日付『北海道新聞』(夕刊)によっている。「沖縄学生2名、特別入学外国人学生4名」の入学先は、「学生 教養部 昭和三十七年入学」(『北海道大学一覧 昭和三十七年』746~749頁)によっている。

- 18) 1962年3月18日付『北海道新聞』(夕刊)。

- 19) 『北大時報』第96号、1962年3月31日、14~15頁。

- 20) 1962年4月10日付『北海道新聞』(夕刊)。

北海道新聞社 HP「フォトサービス」には、同紙掲載写真と同じと思われる写真の閲覧が可能である。筆者が参照した『北海道新聞』(マイクロフィルム版)よりは鮮明である。同写真の Web ページの URL は下記のとおり(閲覧日は2019年3月1日)。

<http://photodb.hokkaido-np.co.jp/detail/0090510839>

- 21) 「北海道大学学生定員・志願者・合格者・入学者数(1949~1976)」。

- 22) 京都府立城南菱創高等学校 HP。URL は下記のとおり(閲覧日は2019年3月1日)

<http://www.kyoto-be.ne.jp/jonanryoso-hs/mt/>

- 23) 1962年3月18日付『北海道新聞』(夕刊)。

- 24) 「高校対策基本方針案」『時事通信内外教育版』1960年7月12日(「戦後日本教育資料集成」編集委員会編『戦後日本教育資料集成』第7巻、三一書房、1983年、184頁)。

- 25) 都道府県教育委員会委員長・教育長協議会「高校急増対策についての要望」『時事通信内外教育版』1960年9月9日(『戦後日本教育資料集成』第7巻、184~185頁)。

- 26) 三上和夫・野崎洋司「高校通学区制度に関する研究」『神戸大学発達科学部研究紀要』第6巻第1号、1998年9月、78~79頁。

- 27) 室蘭清水丘高校の学級増は同校 HP「学校沿革」を、室蘭栄高校の学級増は、室蘭栄高等学校創立100周年記念誌編集委員会編『栄高100年の架橋』(室蘭栄高等学校創立100周年記念事業協賛会、2017年、422頁)を、室蘭工業高校の学科増は同校 HP「室蘭工業高校の歴史」を、室蘭大谷高校については、『北海道学校一覧 昭和三十三年度』204頁を参照した。

室蘭清水丘高校・室蘭工業高校の HP の URL は、それぞれ下記のとおり(閲覧日は2019年3月1日)。

http://www.muroranshimizugaoka.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=91

http://www.muroran-th.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=20

- 28) 1959~1978年の間に設置・開設をみた高等学校については、北海道立教育研究所が編集した「年表」(北海道立教育研究所編・発行『北海道教育史 資料編』第2巻、1996年、717~815頁)を参照した。

- 29) 「公立高等学校通学区区域規則」『北海道公報』号外、1951年5月15日、1頁。

北海道における通学区区域に関する規定の嚆矢は、「北海道公立高等学校区域設定要綱」(昭和二十四年十二月五日北海道教育委員会裁定)であると考えられるが、筆者は未見である。上記通学区区域規則「附

則3」には、同裁定は「廃止する」とある。

30) 「公立高等学校通学区域規則」『北海道公報』号外、1951年5月15日、2～11頁。

31) 筆者は、幌別町立幌別高校・室蘭市立鶴ヶ崎高校・清水丘高校定時制・室蘭工業高校定時制については、小稿にかかわるまで存在を知らずにいた。幌別町立幌別高校・室蘭市立鶴ヶ崎高校は、『北海道教育統計要覧 昭和26年度』には、室蘭栄高校の分校として表記してある。

学校名等は、北海道教育庁総務課編・発行『北海道学校一覧 昭和三十三年度』（1959年）、Web ページ「室蘭工業高校の歴史」を参照した。URL は下記のとおり（閲覧日は2019年3月2日）。

http://www.muroran-th.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=20

32) 「公立高等学校通学区域規則の一部を改正する規則」『北海道教育委員会公報』第1804号、1958年4月1日、1～2頁。

「公立高等学校通学区域規則」第3条は、「通学区域は、地勢、交通状況、行政区画、学校の分布及び通学状況等を考慮して定めるものとする」と定めており、通学区域変更の要素は普通課程新設のみではない。

33) 「公立高等学校の通学区域に関する規則」第2条第1項「別表」、『北海道教育委員会公報』第2806号、1965年6月28日、90頁。

北海道教育委員会編『昭和41年度 北海道学校一覧』（北海道教育庁総務課、1966年、164・168～170・180・182頁）によれば、石狩・後志学区内の公立全日制普通科高校は、札幌東・札幌西・札幌南・札幌北・札幌月寒・江別・千歳・当別・恵庭南・札幌啓成・小樽潮陵・小樽桜陽・小樽千秋・余市・岩内・倶知安・喜茂別・寿都・札幌旭丘・開成・蘭越の21校である。

34) 「公立高等学校通学区域規則」第2条第1項「別表」。『北海道教育委員会公報』（号外）第3894号、1972年11月16日、5～11頁。

（へんみ まさあき／北海道大学名誉教授・大学文書館研究員）

付表1 1962年度文類道内合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名等
28	札幌西
28	札幌南
24	札幌北
22	小樽潮陵
17	旭川東
14	札幌東
7	小樽緑陵
6	旭川北
6	小樽桜陽
6	帯広柏葉
6	帯広三条
6	滝川
5	旭川西
5	函館中部
5	函館西
4	岩見沢東
4	釧路湖陵
4	栗山
4	札幌藤女子
4	砂川南
4	函館東

合格者数	高等学校名等
4	美唄東
4	室蘭清水丘
3	赤平
3	深川西
3	八雲
3	夕張南
3	留萌
3	稚内
2	網走南ヶ丘
2	歌志内
2	江別
2	遠軽
2	釧路江南
2	倶知安
2	名寄
2	三笠
1	阿寒
1	芦別
1	池田
1	岩内
1	浦河

合格者数	高等学校名等
1	興部
1	小樽千秋
1	北見柏陽
1	札幌第一
1	標茶
1	清水
1	斜里
1	寿都
1	千歳
1	苫小牧東
1	奈井江
1	長沼
1	羽幌
1	富良野
1	北海
1	室蘭栄
1	余市
1	検定
計 274名	59校、検定 1

典拠 1962年3月18日付『北海道新聞』(夕刊)

付表2 1962年度文類道外合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名
1	東京教育大附属駒場
1	東京赤坂
1	東京大泉
1	東京学習院
1	東京北
1	東京小石川
1	東京小山台
1	東京新宿
1	東京日大第二
1	東京日比谷
1	東京富士
1	東京三田
1	大阪岸和田
1	大阪泉南
2	大阪三国ヶ丘

合格者数	高等学校名
3	茨城水戸
1	静岡磐田南
1	静岡富士
1	静岡三島北
1	愛知名古屋
1	愛知名大附属
1	愛知明和
1	香川観音寺第一
1	香川高松
1	香川丸亀
1	福岡小倉
1	福岡田川東
1	福岡福岡
2	岩手盛岡第一
1	栃木宇都宮

合格者数	高等学校名
1	栃木大田原
1	埼玉浦和
1	埼玉春日部
1	長野諏訪清陵
1	長野長野
1	福島磐城
1	群馬前橋
1	神奈川湘南
1	京都宮津
1	兵庫六甲
1	岡山朝日
1	愛媛松山北
計 46名	18都府県、42校

典拠 1962年3月18日付『北海道新聞』(夕刊)

付表3 1962年度理類道内合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名
76	札幌南	4	江別	1	池田
53	札幌北	4	遠軽	1	岩見沢西
52	札幌西	4	北見柏陽	1	浦河
25	札幌東	4	釧路江南	1	江差
24	小樽潮陵	4	倶知安	1	長万部
17	函館東	4	札幌藤女子	1	上川
16	旭川西	4	根室	1	上士幌
15	旭川北	4	室蘭栄	1	木古内
15	函館西	3	札幌旭丘	1	札幌工業
13	旭川東	3	砂川北	1	札幌光星
13	岩見沢東	3	富良野	1	札幌第一
10	苫小牧東	3	三笠	1	標茶
10	函館中部	3	夕張南	1	士別
10	室蘭清水丘	2	赤平	1	斜里
9	美唄東	2	足寄	1	伊達
8	芦別	2	網走南丘	1	千歳
8	帯広柏葉	2	帯広三条	1	月形
8	滝川	2	北見北斗	1	津別
7	小樽桜陽	2	栗山	1	天塩
7	小樽千秋	2	月寒	1	羽幌
7	釧路湖陵	2	苫小牧西	1	美幌
6	砂川南	2	奈井江	1	本別
6	名寄	2	深川西	1	室蘭鶴ヶ崎
6	留萌	2	紋別	1	森
5	岩内	2	余市	1	八雲
5	小樽緑陵	2	留辺蘂		
5	夕張北	2	稚内	計	536名 79校

典拠 1962年3月18日付『北海道新聞』（夕刊）

付表4 1962年度理類道外合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名
2	東京青山	1	愛知豊田西	2	埼玉熊谷
2	東京麻布	1	愛知豊橋東	3	埼玉秩父
1	東京板橋	1	愛知名古屋	1	長野
3	東京上野	1	大阪旭	3	長野飯田
1	東京雪谷	1	大阪生野工業	1	長野伊那北
1	東京桜美林	1	大阪池田	1	長野上田
3	東京大泉	2	大阪茨木	5	長野諏訪清陵
5	東京開成	1	大阪今宮	1	長野松本県ヶ丘
3	東京学芸大附属	1	大阪今宮工業	2	長野松本深志
1	東京葛飾野	1	大阪追手門	1	福岡
1	東京北	1	大阪鳳	1	福岡嘉穂東
1	東京教育大附属	1	大阪勝山	1	福岡鞍手
1	東京国立	1	大阪岸和田	1	福岡久留米大附設
4	東京小石川	1	大阪北野	3	福岡小倉
2	東京工大附属工業	1	大阪住吉	2	福岡修猷館

合格者数	高等学校名
2	東京駒場
1	東京城北
1	東京城北学園
3	東京新宿
1	東京成蹊
1	東京成城
1	東京竹早
6	東京立川
2	東京玉川
2	東京千歳
2	東京千歳丘
1	東京獨協
1	東京戸山
3	東京豊多摩
1	東京都立九段
2	東京都立小山台
3	東京西
1	東京日大三
1	東京日本学園
1	東京八丈
1	東京一ツ橋
2	東京日比谷
6	東京北園
2	東京武蔵
1	東京武蔵丘
1	東京明治学院
3	東京明正
2	東京早稲田
8	愛知明和
7	愛知旭丘
5	愛知瑞陵
2	愛知桜台
2	愛知時習館
2	愛知東海
1	愛知一宮
1	愛知犬山
1	愛知岡崎
1	愛知岡崎北
1	愛知学習館
1	愛知刈谷
1	愛知滝実業
1	富山県立泊
1	富山商船
1	富山砺波
1	福島
1	福島会津
3	福島磐城
1	福島棚倉

合格者数	高等学校名
1	大阪大手前
2	大阪高津
1	大阪天王寺
3	大阪豊中
5	大阪三国丘
3	神奈川栄光学園
3	神奈川小田原
1	神奈川関東学院六浦
2	神奈川湘南
2	神奈川鶴見
4	神奈川横須賀
5	神奈川横浜翠嵐
1	神奈川横浜戸塚
2	神奈川横浜平沼
1	神奈川横浜南
1	神奈川吉田島農林
4	静岡
1	静岡伊東
1	静岡磐田南
1	静岡掛川西
1	静岡清水東
1	静岡下田北
2	静岡韮山
1	静岡沼津工業
2	静岡沼津東
1	静岡浜松北
2	静岡浜松西
2	兵庫
3	兵庫明石
1	兵庫芦屋
1	兵庫甲南
2	兵庫神戸
1	兵庫甲陽学院
1	兵庫篠山鳳鳴
1	兵庫高砂
2	兵庫灘
1	兵庫西宮
1	兵庫六甲
4	埼玉浦和
1	埼玉春日部
4	埼玉川越
2	石川小松
1	石川羽咋
3	岐阜
1	岐阜中津
1	岡山朝日
1	岡山倉敷青陵
1	岡山操山

合格者数	高等学校名
1	福岡田川
1	福岡東筑
1	福岡戸畑中央
1	福岡若松
3	青森
3	青森弘前
1	青森田名部
5	青森八戸
1	広島学院
1	広島国泰寺
7	広島修道
1	広島大附属
1	広島広
1	広島舟入
5	茨城水戸第一
4	茨城土浦第一
2	千葉
1	千葉安房第一
1	千葉匝瑛
2	千葉第一
2	千葉東葛飾
1	千葉船橋
2	栃木
1	栃木足利
1	栃木足利工業
2	栃木宇都宮
1	栃木大田原
1	栃木佐野
5	秋田
1	秋田大館鳳鳴
1	秋田花輪
3	岩手盛岡第一
2	岩手花巻北
1	岩手釜石
1	岩手宮古
1	群馬太田
1	群馬高崎
2	群馬富岡
3	群馬前橋
2	富山
2	富山魚津
1	山梨峡北
1	山梨巨摩
1	山梨日川
1	三重松阪
2	三重四日市
1	京都市城南
1	京都同志社

合格者数	高等学校名
1	山口
1	山口岩国
4	山口下関西
2	山形酒田東
1	山形東
2	山形米沢興譲館
2	福井勝山
2	福井藤島
1	福井若狭
4	高知土佐
1	高知丸ノ内
1	新潟柏崎
1	新潟佐渡
1	新潟直江津
1	新潟長岡
1	金沢泉丘

合格者数	高等学校名
1	岡山津山
1	島根出雲産業
1	島根川本
1	島根浜田
1	島根松江
1	香川観音寺第一
1	香川高松
1	香川土庄
1	香川丸亀
1	宮崎大宮
1	宮崎日南
1	宮崎延岡恒富
1	宮崎都城泉丘
1	愛媛今治北
1	愛媛今治西
1	愛媛松山東

合格者数	高等学校名
1	京都洛星
1	和歌山新宮
1	和歌山日高
1	鳥取倉吉東
1	鳥取八頭
2	徳島城南
1	佐賀
1	佐賀小城
1	宮城仙台第二
1	滋賀膳所
1	奈良
1	大分上野丘
1	熊本済々黌
1	鹿児島甲南
計 404名	44都府県、235校

典拠 1962年3月18日付『北海道新聞』（夕刊）

付表5 1962年度水産類道内合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名
13	札幌東
12	札幌西
11	旭川東
6	岩見沢東
6	小樽桜陽
6	小樽潮陵
6	札幌旭丘
5	旭川西
5	三笠
4	札幌北
4	砂川南
3	旭川北
3	岩見沢西
3	小樽緑陵
3	札幌南
3	滝川
3	函館西
3	函館東

合格者数	高等学校名
3	室蘭清水丘
2	池田
2	帯広柏葉
2	北見北斗
2	釧路湖陵
2	栗山
2	札幌光星
2	白糠
2	月寒
2	稚内
1	赤平
1	芦別
1	網走南ヶ丘
1	江部乙
1	江別
1	札幌第一
1	士別
1	斜里

合格者数	高等学校名
1	砂川北
1	月形
1	天塩
1	十勝清水
1	奈井江
1	中標津
1	名寄
1	函館中部
1	富良野
1	増毛
1	室蘭栄
1	紋別
1	夕張北
1	夕張南
1	留萌
計 143名	51校

典拠 1962年3月18日付『北海道新聞』（夕刊）

付表6 1962年度水産類道外合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名
1	東京明正	1	大阪泉陽	1	岡山高梁
1	東京駒場	1	大阪茨木	1	岡山西大寺
1	東京青山	1	大阪清水谷	1	秋田大館鳳鳴
1	東京千歳丘	1	静岡沼津東	1	山形鶴岡南
1	東京城南	1	静岡浜松西	1	茨城水戸第一
1	東京城北	1	静岡藤枝東	1	群馬渋川
1	東京桐朋	1	静岡浜松北	1	新潟長岡
1	東京大附属	1	福島会津	1	神奈川鶴見
1	東京墨田川	2	福島磐城	1	富山魚津
1	東京石神井	1	福岡久留米大附設	1	福井大野
1	東京松原	1	福岡小倉	1	岐阜大垣北
1	愛知瑞陵	1	福岡筑紫丘	1	島根松江
1	愛知刈谷	1	栃木佐野	1	香川観音寺第一
1	愛知旭丘	1	栃木宇都宮	1	愛媛丹原
1	愛知向陽	1	埼玉不動岡	1	高知土佐
1	愛知東海	1	埼玉浦和	1	大分杵築
1	愛知尾張	1	長野飯山北	1	鹿児島玉竜
1	愛知時習館	1	長野大町		
1	大阪今宮工業	1	兵庫農業		
2	大阪大手前	1	兵庫甲陽	計	59名 26都府県、57校

典拠 1962年3月18日付『北海道新聞』(夕刊)

付表7 1962年度医学進学課程道内合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名
7	札幌南	1	赤平	1	函館中部
6	札幌西	1	網走南丘	1	富良野
4	旭川東	1	岩見沢東	1	室蘭栄
3	札幌北	1	上川	1	室蘭清水丘
2	旭川北	1	北見柏陽	1	夕張北
2	旭川西	1	北見北斗	1	夕張南
2	小樽潮陵	1	札幌藤	1	湧別
2	小樽千秋	1	士別	1	留辺蘂
2	帯広三条	1	砂川南	1	稚内
2	函館西	1	月寒	計	51名 29校

典拠 1962年3月18日付『北海道新聞』(夕刊)

付表8 1962年度医学進学課程道外合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名
1	東京青山	1	青森八戸	1	埼玉浦和
1	東京井草	1	青森弘前	1	千葉船橋
1	東京教育大附属駒場	2	山形酒田東	1	神奈川浅野
2	東京立川	1	栃木足利	1	静岡沼津東
1	東京千歳丘	1	栃木宇都宮	1	愛知旭丘
1	東京西	2	山梨甲府第一	1	金沢大附属
1	東京北園	2	長野飯田	1	福井勝山
1	東京早稲田	2	山口下関西	1	京都洛星
2	兵庫神戸	1	秋田	1	鹿児島ウ・サール
1	兵庫甲陽	1	福島相馬	計 35名	19都府県、29校

典拠 1962年3月18日付『北海道新聞』（夕刊）

付表9 1978年度文類道内合格者数・出身高等学校

合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名	合格者数	高等学校名
54	札幌北	3	旭川北	1	岩内
43	札幌南	3	江別	1	富良野
29	旭川東	3	札幌光星	1	岩見沢西
28	札幌西	3	札幌藻岩	1	留萌
21	札幌旭丘	3	帯広柏葉	1	網走南丘
19	岩見沢東	3	北見北斗	1	滝上
15	小樽潮陵	3	夕張北	1	美深
10	札幌東	2	札幌藤女子	1	小樽桜陽
9	室蘭栄	2	札幌清田	1	足寄
8	函館中部	2	釧路江南	1	桧山北
8	札幌開成	2	旭川西	1	羽幌
7	函館ウ・サール	2	函館東	1	函館工業高専
7	苫小牧東	2	伊達	1	札幌北陵
6	札幌啓成	2	静内	1	札幌手稲
5	滝川	2	士別	1	風連
5	釧路湖陵	2	枝幸	1	美唄東
4	札幌月寒	2	倶知安	計 345名	54校
4	深川西	1	芦別		
4	名寄	1	根室		

典拠 1978年3月16日付『北海道新聞』（夕刊）